

そこが遣わされた場所

(ルカ10・15-12)

一、9章と10章の記述を比べて

ルカの福音書9章と10章の記述を比べてみると、微妙に内容が異なります。ひと言で申しますなら、9章に記されている十二人に対してより、10章の七十二人に対して語られていることばのほうが長いですし、また厳しいです。ちなみに10章4節で、次のように語られています。〈財布も袋も持たず、履き物もはかずに行きなさい。〉と。これに対応する9章のことばは、3節です。〈旅には何も持って行かないようにしなさい。杖も袋もパンも金もです。また下着もそれぞれ一枚持つてはいけません。〉とあります。「旅には何も持って行かないように」は共通項ですが、顕著なのは、10章の七十二人に対する「履き物もはかずに行きなさい」です。旅をする者が履き物をはかないとは厳しいです。

ありませんでした」と答えた。と。このところにおける〈弟子たち〉は、前後関係より十二人、すなわち十二使徒です。9章の記述では、主は十一人に〈財布も袋も履き物も持たず〉とはいけません。〈と〉はおっしゃいませんでした。〈旅には何も持って行かないようにしなさい。杖も袋もパンも金もです〉と言われました。そういうわけで、十二人に対しても、七十二人に対しても、主は同じことをおっしゃったと受け止める方が良いと考えます。

二、遣わされた者を受け入れる

福音を伝えるのは個人ではなく教会の働きです——たとえ個人伝道であったとしても、それは教会の働きです——。且つ伝道は、最終的には人と人との係わりの中でなされるものです。ゆえに、主はおっしゃいました。2節です。〈そして彼らに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主として、自分の収穫のために働き手を送ってくださいるように祈りなさい。〉と。

そして伝道は、精神的な戦いを強いられる働きでもあります。ゆえに、主はおっしゃいました。3節です。〈さあ、行きなさい。いいですか。わたしがあなたを遣わすのは、狼の中に子羊を送り出すようなものです。〉と。

福音宣教の働きは、宣教師が生活の糧を得るために、自分で働きつつでき

るものではありません。もちろん、伝道者が生活費を得るために働くこともありますし、地域によって、週日は職場に勤めるほうが人との接点を持つことができ、伝道のために役立つ場合もあります。ですが基本は、遣わされた場所で報酬を受けることです。主はおっしゃいました。4節です。〈財布も袋も持たず、履き物もはかずに行きなさい。道でだれにもあいさつしてはいけません。〉と。

また住む場所も、良い条件を求めて転々と移動するのではなく、次の場所に遣わされるまで、そこに留まる形を採ります。5節、6節、7節、8節です。〈どの家に入っても、まず、『この家に平安があるように』と言いなさい。そこに平安の子がいたら、あなたがたの平安は、その人の上にとどまります。いなければ、その平安はあなたがたに返って来ます。その家にとどまり、出される物を食べたり飲んだりしなさい。働く者が報酬を受けるのは当然だからです。家から家へと渡り歩いてはいけません。どの町に入っても、人々があなたがたを受け入れてくれたら、出された物を食べなさい。〉と。

遣わされた者は、その場所を拠点として神の国の福音を、すなわち神が支配される目に見えない王国を伝えます。9節です。〈そして、その町の病人を癒やし、彼らに『神の国があなたがたの近

くに来ている』と言いなさい。〉と。もし受け入れられなかったなら、出て行って次の場所に移ります。

三、そこが遣わされた場所

さてこれまで私は、使徒のこと、宣教者のこと、伝道者のことを語りました。たしかに主に召されて、その働きに就く方がいます。

ですが、最後に申し上げたいことは、大きな意味では主イエス・キリストを信じる一人ひとりが、主イエスによって遣わされていると言つこととです。どこに、でしよつか。今、皆さまがいるところと。神が許されて、そこにいると受け止めるのがよろしいです。もちろん、そこから逃れてはならないという意味ではありません。思いが定まったら転職する、あるいは新しい一步を踏み出すことも大切です。ですが、それはともかく、今置かれているところが、主が遣わされた場所です。

どの家に入っても、あるいはどの場所に行っても、まず、「この家に平安があるように」と心の中で祈つたら良いです。その家の中に、あるいはその場所に、キリストを信じる私たちを迎えてくださる方がいたら、その平安は相手の上にとどまります。拒否したら、その平安は私たちに返って来るといふことです。